

天空の郷地域福祉フェスティバル in 久万高原 シンポジウム まとめ

日時：平成25年7月21日（日）

10:30~12:00

場所：久万高原町産業文化会館「ホール」

【出演者】

コーディネーター：今治NPOサポートセンター 事務局長 山本 優子 氏
パネラー：いよココロザシ大学 理事長 泉谷 昇 氏
森のともだち農園 代表取締役 森 智子 氏
実行委員会 実行委員長 竹森 洋輔 氏

【実行委員会の取り組みについて】

（実行委員会 委員長 竹森氏）

- ・久万高原町は、過疎化、少子高齢化など様々な問題を抱えている。そのなかで、もっと身近なところで何ができるのか、久万高原町をどのようなまちにしていきたいかということをも19名の異業種の方が集まり、話し合ってきた。
- ・話し合いの中では、独居の不安や、田畑や風景を残していきたいといった思いなど、様々な意見が出された。今回は特にもう一度縁側をつくる居場所づくりと、久万高原町の豊かな自然と人を活かす資源活用の2つのテーマに絞り、久万高原町を活性化していくことにした。
- ・実行委員会は、社協がコーディネートを行い、民間との協働で行ってきた。このような取り組みは初めて。今回は、住民代表という立場で登壇させてもらっている。皆さんからも自由に意見を出してほしい。この後のお2人からの事例報告で、どういった気づきが必要なのかお話しただけと思う。

【資源活用の事例】

（いよココロザシ大学 泉谷氏）

- ・「誰でも先生、誰でも生徒、どこでもキャンパス」をテーマに、2011年にいよココロザシ大学を開校した。
- ・生まれも育ちも東京だが、フィルムコミッションで愛媛にやってきた。フィルムコミッションでは、映画を愛媛県で撮りたいという方と愛媛の橋渡しの役割をしている。観光地ではなくても、ストーリー性のある場所を探し、愛媛県の魅力を発信し続けている。
- ・愛媛県の魅力である、場所、文化や人は変化していく。しかし、映画では提案した2~3割しか使用されない。そういったジレンマが生まれた。また、愛媛県人もその魅力に気が付いていないことも課題だった。どうすれば、撮影以外で地域の魅力を知ってもらえるのかというところから、学び合いの場としていよココロザシ大学がスタートした。
- ・いよココロザシ大学では、何らかの趣味、経験、知識、ノウハウを持った市民を、先生として、県内の様々な所で授業を行なっている。事業をとおして、人、資源、魅力を繋がっている。
- ・自分の口で地域の魅力を伝えられるようにしようということを目指している。
- ・資源とは、光輝いているものではなく、何気なくあるもの。ただ、言えることは、地域の方が大切にされていることは、間違いなく地域資源。

- ・地域の魅力を再考することを提案したい。一般的に地域資源は有形物、目に見えるものが言われるがそれだけではない。味や方言、文化などの無形物、目に見えないものも地域資源である。地域の魅力は、遠い所にあるものではなく、意外と近くにあるもの。普段生活していると気が付かないからこそ、いよココロザシ大学というフィルターを使って、掘り起こしをしている。
- ・地域の魅力を細分化を行なっていくと、地域資源はたくさん出て来る。皆さんもこの気づきを試してほしい。

【意見交換】

- (山本氏) 大学や学びというと、教えられるというイメージがあったが、学びの中に皆が入っていくような感じがした。学び合いの中で変化があったことなどはあるか。
- (泉谷氏) お互いに教え合う形なので、授業終了後に参加者同士でサークル活動が生まれたりしている。いよココロザシ大学は起点にすぎないので、このような自発的な活動が生まれている。
- (山本氏) 資源は、有形物だけではないという話だったが、皆さんが大切にしていることは何か。
- (森 氏) 家族、地域のともだち、故郷
- (竹森氏) 家族

【事例報告】

(森のともだち農園 森氏)

- ・よく「ここが好きで」というテーマを使用する。20歳の時に玉川に戻ってから30年、ただの場所から「ここ」に変わる瞬間を感じてきた。
- ・田舎には何もなかったと思っていたが、地域での活動をとおして、子どもも大人も異年齢で育つことと、地域の子どものにとって「特別な大人」になり、子供の成長を見守れることの素晴らしさを感じてきた。
- ・いつも活動のキーワードは子ども。子どもの心にもふるさを作りたい。子どもは、時間、空間、仲間の3つの間で育つと思っている。そして、それらは全て地域にある。
- ・30代の頃に地元で産業と雇用を作りたいと「森のともだち農園」をはじめた。特産品づくりは、地域の皆に頑張ってもらわないといけない。自分のものが皆のものになっていくのを感じた。
- ・色々な場づくりをとおして、今ある場所にマンパワーをからめると場になることを実感した。そして、地域の人としての自覚が生まれ、地元の愛着が深まる。
- ・今までの活動から、元気な町には3つの共通点があると思う。
 - ①町に仕組みと仕掛けがあること
 - ②町に居場所と出番があること
 - ③よきリーダーがいること
 言い換えれば町づくりに深く参画していること
- ・玉川地区の地域活性化事業として、「玉川ネット」という取り組みを行なっている。HPをつくり、パソコンを使えない世代の暮らしの知恵などを、パソコンを使える世代がHPに掲載する。これにより、人とのかわり合いが生まれてきている。
- ・「新しい公共」に向けて地域の受皿になるため、昨年度NPOを立ち上げた。
- ・諦める気持ちと理由はたくさんあるが、自分自身を自分の町を諦めたくないから、活動している。ま

ちづくりとは、人が人としてより良く生き、一人一人が幸せに暮らすことだと思う。

- ・久万高原町が「場所」から意味のある「場」に変わるとき、愛着がわいてくるのでは。「ここが好き」が皆にあってほしい。

【意見交換】

(山本氏) 小さなサイズの場でいいというヒントがあった。森さんにとって、「場」での決まりごとはあるか。なんとなく集まっていた場がちゃんとした場になるのは。

(森氏) 言ってはいけないキーワードがある。「私なんか」「どうせ」などのマイナスの言葉。あとは、色々な意見があっていい。ただ、自分がやらないのに、人の足は引っ張ってはいけないと思う。

(山本氏) 森さんから、「伝えたいこと」があれば、誰でも先生になれる。そして、人が集まってくるということを学んだのでは。

【意見交換】

(山本氏) 今までの活動で乗り越えてきたことは何か。

(泉谷氏) 活動は1人ではできないが、人が集まると価値観の違いが生まれてくる。地域を良くしたいという目的は同じでも、考え方やプロセスはそれぞれ違う。そんな時に大切にしているのは、「まとめる」ということではなく、「つなげる」ということ。それぞれの価値観を認めた上で、強みをつなげることを意識している。

(森氏) 地元で長い間暮らしていると、人と人との意見や価値観の違いがストレスに感じることもある。しかし、受け入れ、共感できるようになってきた。どこにいても合わない人はいるが、田舎暮らしの良さは、そういう人にも会う機会があることだと思う。時間の共有が関係を修復するチャンスにとらえると、自分に足りない事を学べる有り難いことだと思えるようになった。

(山本氏) 色々な人がいるからこそ、新しい事が生まれるということを感じた。

(竹森氏) 今まで客席で座っている立場だったが、自分で何かを考えて行くと楽しくなってくる。このシンポジウムで答えを出そうとは思っていない。午後からの分科会を含めて、参加者の方に何かを持ち帰ってもらいたい。

(山本氏) 午後からの分科会に向けてのメッセージを。

(森氏) 第1分科会では、居場所づくりをテーマにする。皆さんの町にとって心地よい居場所をつくるにはどのようにしたら良いか、ざっくばらんに語りあっていきたい。

(泉谷氏) 色々な活動が出て来る。

(山本氏) 分科会でも、語り合い繋がり合ってもらいたい。